

これからの私立幼稚園

——日私幼全国教研大会で感じたこと——



友松あきみち

一、現実には胎動している

地方に出た折にはつとめて土地の保育施設を訪れるようにしているが、都会で気心の知れた仲間と話し合っていることは違っていて、わが国の保育の現実についていろいろと考えさせられることが多い。戦後は施設も各地に増加して保育の仕事はきわめて進捗を見させてきたが、どちらかと言うと世間では教育的な期待が強いようであった。保育所なども地方によってはほとんど幼稚園化していて、そのような保育態度で運営されることが父兄の信頼に

応えることでもあった。だがこのところ、一般人の保育施設に対する要求は多少変わってきているように感じられる。

それは幼稚園を含めてのことなのだが、平凡に言って繁雑多忙な家庭生活の延長の上で施設に期待する声が強くなってきている。長時間保育などはその顕著な一例であるが、農村とか商工業地では時間的に保育所化してきた幼稚園がとみに増えているようである。父兄負担の保育費なども、地方では都市とは比較にならないほど低廉なところもあって、その点からも幼稚園と保育所とはますます世間で同一視されてきているのではないかと思う。

都会では公立保育所の中にもかなり幼稚園化している所が目につくから、保育施設の性格が全国的に少しずつ変容していることに、それほど関心を示さない人も保育者の中にはいるかもしれない。だが、この七月二十七・八日に神奈川県小田原で開かれた日私幼の全国教研大会では、その点についていろいろと考えさせられる協議内容が含まれていた。二千五百名に及ぶ参会者のうち、園長とか主任教諭といった園の運営に直接関連のある人々の多くが参集した第一分科会で、主題としていたのは「幼稚園教育の、これからの方向」についてである。出席者は六百名ほどだった。そこでは、従来に見られぬかなりはげしい論議が活発にかわされた。

私立の集まりでは保育内容について研究なり討議がすすめられ

る場合でも、経営管理についての配慮が併行しておこなわれることが多い。見ようによってはそこに限界もあるけれど、一面では今日の国情にてらして、とりわけ一般社会の素朴な歩みにしたがって幼児教育が押しすすめられていくところに、問題の所在を抽象化してしまわず、常に現実に根をおろした歴史的な真実感がある。とくに今回のように、これからの私立幼稚園の運営にかかるとる保育内容のすすめ方について、最近これほど内部で真剣に論じ合われた機会はなかったように思う。これまでは、とかく組織の外側から示される教育内容によって方向づけられてきた私幼の人々が、現実の運営に思い悩んだ末に、自分たちの努力で自分たちの保育を意義づけようとするところに大きな意味もあるのだと思う。

二、討議内容が意味しているもの

次に、この分科会の主題設定の理由と、参加者によって討議された課題内容について記しておきたい。そこには、わが国の幼児教育が当面している諸問題も羅列されているが、ことさらになぜこれらの諸点が私幼の大会でクローズアップされてきたかを考えてみることは興味深いことである。

(一)分科会主題……「幼稚園教育の方向」

(二)主題設定の理由……わが国の現在の幼児教育のあり方をかな

らずしも前提とせず、自由な立場から幼児教育の意味とそのあり方について考えてみたい。それには保育史をみることによって時代の要求を受け、変革をみ、今日まで発展してきた経緯を語り合うことも大切であり、現実の諸問題にふれてその位置づけを考えてみることも必要である。

(三)研究課題の内容

1、就学前の教育的内容、いわゆる保育の意味すべきこと。

①わが国幼稚園教育の特質を考えてみる。②諸外国における

幼児教育の実態を比較して現状にてらして考えてみる。③学校

体系の中の幼児教育は、このままであったらどういう方向に進

んでゆくだろうか。④「幼稚園教育要領」に対して現場とし

て、また私立幼稚園としてどう受けとったらよいか。⑤幼稚園

における社会福祉の分野、例えば、保育時間の問題などについて

考えてみよう。⑥これからの私立幼稚園のあり方について、

以上の見通しをもってわれわれの考えをまとめてみよう。

2、保育者に望まれるもの、現場に欠けていること。

①これからの現場にとくに望まれる教育技術は、どんなところに重点がおかれてゆくべきだろうか。②私立幼稚園として、保育

理念の確立が望まれるとすると、それはどういう形でつくりださ

れてゆくだろうか。③教員養成の問題について、現場に欠けて

いるものを反省して、これからの望ましいあり方を考えてみる。

3、施設設備。

① これからの幼稚園教育が新しい方向に進むと考えるならば、とくに必要とされる施設設備はどうあるべきだろうか。② 「新しい幼稚園設置基準」についての見解を統一して、今後の対策も考えてみる。

4、望ましい園の教育管理。

① 現在おこなわれている管理の方法に反省すべき点はないだろうか、問題点となっているところを考えてみよう。② 私立幼稚園が、わが国幼児教育の主体となるためには、今後とくに考慮されねばならぬことが教育管理の面にもあるはずである。とくに教育と経営の関連から望ましい諸問題について具体的に考えてみたい。

以上（傍点は筆者）

分科会の研究内容は日私幼の研究委員会で起案され、常任理事会で協議了承されたものである。従来このような課題で討議のおこなわれる場合には、多くは公立の幼稚園や保育所と比較して、私幼の独自性、特殊性が強調される機会が多かった。その点保育の内容について運営面から問題は掘げられてきてはいるが、観点の主体はあくまで幼児なら、幼児の家庭におかれており、そこから施設の存在意義を見出そうとしているところに一歩前進があったのだと思う。

三、多元化の歩み

これが数年前のことであったなら、このような課題のとりあげ方はまず内側の反対によって実現しなかったに違いない。事実、両日にわたっての討議の経緯をたどってみても、従来の幼稚園教育を是とする者と、保育所としての意味を加味した施設に変容してゆくことを是とする者と、意見は二つに大きく分かれて出てきている。

前者は主として都会の幼稚園の発言であって、それも永い歴史を持つているとか、経営に一応の安定をみているところが多いように見うけられた。それに反して後者では、地方における町村民の要求とか公立保育所との関係など主として外部的事情から、長時間保育に移行せざるを得ない施設の発言が多かった。会の大勢を結論的に言うと、これからの私立幼稚園は収容する幼児家庭の生活環境にしたがって、各種の保育内容がおこなわれて然るべきことを暗黙のうちに認めざるを得ない空気が会場を支配したのである。

今日地方によっては現実に国庫負担による公立保育所の新設が増大しており、措置費の負担額も年ごとに増額されて、徴収基準が改正されたとは言え保育所運営の安定化は着実におこなわれている。加えて、ここ数年に及ぶ国民経済の上昇は被保護家庭の数

を減少させており、低額所得層においては幼稚園と保育所にわけて幼児をたくする家庭の経済的差異を論証する根拠さえも追々に失わしめているのである。

歴史的に顧みれば幼稚園と保育所の歩いてきた道には多少異なるところもあるけれども、今このような施設運営の現実から、保育内容の上で一元化されてゆく傾向が私立幼稚園の中に内蔵されてきているということは注目しなければならないことだ。学問的に保育の理想論を述べることは易しいことだが、現実には過去において行政的な二元化を解消する力はなかった。今日ではかえって施設組織の内側から、一元化とも多元化とも解決できるところの現実の胎動が始まっている。

四、もの思うことと在り

この分科会では時間に制約もあって、設備とか教諭の待遇改善などについて深く言及することがなかった。だが上記の課題内容からも推測できるように分科会のねらいの中には、今日の私幼の現状を了承してたとえ長時間保育を認める場合でも、当然設置者として考慮すべき諸点の多く残されていることを指摘して、経営本位からくる保育の混乱を防ごうとする意図が含まれていた。設備としては休息とか給食に関する配慮も必要であろうし、保育の内容については一そう幼児の健康とか情緒の安定ということが考

慮されていかねばならない。そこには、保育者として安易に踏みきれぬ保育の責任が内在していることで重大な警告が発せられていたのだと解釈してよからう。

だが大会も終って、私個人の見解を言わしめれば、これからの私立幼稚園の多くは国民の福祉に保育の目的が結びつかなければ園運営の安定を期待できぬであろうし、教諭諸君の給与の改善もじゅうぶんにはおこなわれまいと思われる。三つ児の魂百までの俗譬をもって、将来の保育効果を空論したり幼児教育の重要性を主張することより、今日ただいまの生活の中でまず家庭の支えとなり、幼児のよき生活の導き手となることが、保育者としては仕事の使命観も明白となつて、幼児保育の意味あいも一そう深まってくるのではなからうか。分科会において従来の幼稚園教育を是とする発言者の多くには正統論としての教育的自信がみなぎっていたが、はたして私幼としてどれほど保育内容の向上に寄与してきたかを反省するとき、一面では限られた社会階層を対象としてきた幼稚園教育の空しさも覚えるのだった。おそらく幼児教育は、保育者の多くが自分の園中心でなく日本の保育界の行く末について考えが及び、ひろく一般社会の歩みについて適確な認識がおこなわれる日がくるまで、今日のような混迷がつづくのであろうか。

(神田寺幼稚園)